

1. 幼児期・学童期小児の下顎底部皮質骨の厚さに関する臨床的研究  
-日本人と中国人の比較-

○葛 立宏、牧 憲司、西田郁子、森本彰子、内上堀征人、木村光孝

九歯大・小児歯

目的：近年、日本では小児期の食物摂取上の問題が頻繁に提起されている。この原因として食品加工・保存技術の進歩に伴う食物の軟化による咀嚼機構の変化が生じている。一方、中国においても食物の軟化傾向が進んでいることが報告されている。このような時代背景の中で、小児期の顎骨の形態計測を行うことは重要であるが報告は少ない。今回、演者らは日本と中国の小児を対象にパノラマX線写真を使用し、下顎底部皮質骨の厚さを計測し若干の知見を得たので報告する。

対象及び方法：対象は九州歯科大学附属病院小児歯科外来と北京医科大学口腔医学院小児歯科外来を受診した4歳から8歳までの男児50名、女児50名の計100名である、今回、測定の対象は中国人小児は全て漢民族であった。測定方法は、トレースしたパノラマX線写真の下顎底部に基準となる接線A-Bを引き、この基準線に対して下顎第一大臼歯の遠心根から直交するように垂線を引く。次に垂線が下顎底部質骨上縁と下縁に交叉して生じるa-a'の距離を1/20mm目盛りノギスで5回計測し、機種種の拡大率により補正を行いその平均値を測定値とした。

結果及び考察：測定結果よりt検定を行ったところ、男女間、左右間有意差は4歳から8歳までいずれの年齢間においても日本人小児、中国人小児とも有意差は認められなかった。また4歳から8歳までいずれの年齢間においても中国人小児が日本小児に比較して有意に高値であった。

2. 小児の顎・顔面の成長発育に関する研究

1. 乳歯列期側貌頭部X線規格写真の分析

○植村美登里、古賀美佐、進士久明、本川 渉

福岡歯科大学小児歯科学講座

最近の小児歯科臨床では、齲蝕治療だけでなく、予防処置あるいは咬合誘導処置を行うことが多くなってきた。中でも特に不正咬合を可能な限り予測し予防することは、我々小児歯科医にとって臨床上極めて重要なことと思われる。そこで演者らは、乳歯列期の正常咬合者および不正咬合者について一般的に用いられている頭部X線規格写真を用い分析を行った。

さらにKimの分析によってODI, APDI値を算出し、乳歯列においても不正咬合の傾向を診る指標となり得るかを検討した。

資料は本学附属病院小児歯科所蔵の側貌頭部X線規格写真の中からHellmanのDental age II A期の、正常咬合者100名、不正咬合者83名を選出した。そして咬合状態により分類し、それぞれの平均値と標準偏差を算出し、以下のような結果を得た。

1. 不正咬合者の頭部X線規格写真分析値はほとんどが正常咬合者の分析値の1 S.D.内であった。
2. Kimの分析において乳歯列正常咬合者の平均ODI値は76.67°、平均APDI値は74.59°であった。
3. 乳歯列においても永久歯列と同様に、不正咬合のODI, APDIの値は正常咬合の値と比較することによって垂直方向・水平方向の咬合の特徴を示すことがわかった。